淋數座の慰

N17
2283

門 へ利7
雑 2.283
巻

自寛永
延宝
至宝永
はやりかうた

自延宝四年至文化十二年及百四十年古寫
本可愛玩今茲乙亥三月上浣拾春高子補表
裝所藏也

式亭主人

愚意

柳延宝丙辰八月上旬の変なるに。獨り寢の淋敷
侭に色々の草紙を見て。心を慰むうちに我胄て。
音楽。不調法なるに依て。此草紙八十冊に及ひて。
見るに。世にはやりし。音楽の類。思ひ出して。慰む
所に。世の人の心。一品に心を留ず。年に或度か。移
り代りて。古きは捨る故。專ちうたい歌し変こと。
見聞に随て。古き。新敷を撰ばす。此双紙に集て。淋
敷座の慰ミ(ま)ばて。ふわらべの、歌いとゐす者なり。
若音楽に。志ある人是を見は。或不足。又は誤り而
ヒ。多からん。あはれ礼さ〳〵におゐては。我望是
にたつのじ又書。かりきてん。一心二河白道。或三味
線。小弓、且、尺八等の歌は。夫々の冊に。委敷記しあ
るに依て。今爰に。累すものなり。其外。予未見聞音
楽。又は覺へても。はやらさる事。或哥に依て。名の
不知は除之て。名高き。音楽の類はやり。撰み出し
て悉く。此一冊に。綴之畢

于時延宝四中秋上旬日

淋敷座之歴、全八月録

一○本朝王代記の謡　一
一○異国王代記の謡　二
一○名香名寄の謡　三
一○鉄輪の通行　四
一○小舞　五
一○哥枕通行　六
一○弓場意恨通行　七
一○地蔵の通行　八
一○義氏の通行　九

慶應義塾

一□笛の段　十
一□四季のちやう　十一
一△當世都めくり　十二
一△河内通ひ　十三
一△吉原ゑびすおろし　十四
一○ばやり祭文　十五
一△吉原大夫祭文　十六
一△野良祭文　十七
一□江戸まんさい　十八
一□大峯まんさい　十九

十口付

一□吉原太夫まんさい
一□野良まんさい
一□吉原太夫後世たゝき
一□吉原太夫紋尽しのたゝき
一○昔大黒舞
一○中古大黒舞
一○西国巡礼哥品々
一○坂東巡礼哥品々
一△忍ひくゝき木やり
一□秋の夜くゝき木やり

三口付

一□吉原太夫くゝき木やり
一□野良くゝき木やり
一□春駒くゝき木やり
一△きり〳〵すくゝき木やり
一△敷切瘉くゝき木やり
一□島くゝき木やり
一△楠木くゝき木やり
一△醫者くゝき木やり
一△通盛くゝき木やり
一△西行くゝき木やり

一△北野天神くどき本やり

一○八島くどき本やり

一△お江戸くどき船哥

一△若衆くどき船哥

一□鳥さしくどき船哥

一△たもい物くどき

一△琴の歌品々

一○鞠つき歌

一○盆歌品々

一○らうさいかたはち昔ふし品々

一○昔ふ六ふし

一○昔ほそり

一○櫻川のふし

一○はやり長歌

一△さよの中山長歌

一△なけふし品々

一△志な者の歌

一△やよやふし

一□はやり物の歌

一□さんや源五兵衛ふし品々

十九 百四十九 ニ十 三十四 五十四

一□稙り源五衆ふし品々 六ツ

一□のわさんふし品々 廿七

一□さわき歌品々 ニツ

一京はやりふし

一浮世いそへ歌ふし

一稙りせうめなふし

一のつちりふぐにるふし

一谷中うときふし

一御門徒與五平ふし

一大坂から墨ふし

東京 樣原製

一□吉原さてよくりさてよふし品々

△目録畢

前後□傳有之

都合音楽ニ百七十

件数合百十五枚

淋敷座之慰　全

△次第不同

本朝王代記之謠

一夫仁王の御代茅神武後請安寧懿德孝照孝安
孝霊孝元開化崇神は十代の帝垂仁景行成務
仲哀神功應仁神仁德履中反正允恭二十代　安
康雄略清寧顕宗仁賢武烈継体安閑宣化欽明
三十代敏達用明崇峻推古欽明皇極孝德齊明
天智天武四十代　持統武文元明元正聖武孝
謙廃帝称德光仁桓武五十代平城嵯峨淳和仁

明文德清和陽成光孝宇多醍醐六十代朱雀村
上冷泉円融花山一條三条後一条朱雀院後冷
泉院七十代後三条白川堀川鳥羽崇德近衛後
白河二条六条高倉八十代なり安德後鳥羽土
御門順德後堀川四条後嵯峨後深草亀山後宇
多九十代伏見後伏見後二条花園後醍醐光厳
後々醍醐光明崇光後光厳百代　後圓融後小
松称光後花園後土御門後柏原後奈良の院正
親町後陽成當今迄八百十代四海浪静まりて万
民ときをあふぐ今上皇帝の御代久しか

右イニハ
百八代後陽成院
百九代太上皇帝
百十代女帝本院
百十一代後光明院
百十二代新院
百十三代今上皇帝
百十四代今上皇帝

りける

異国王代譜

一伏羲神農と皇帝是を三かうと云天地につかさどれり少皇瑞玉かうさんとうぎやうぐさ
四人迄は五帝なり夏には禹王をはじめて
夏の桀迄は十七代君の道なき故障より終に
誅せらるゝこそ王殷のはじめまて三十七代
の時に紂王の悪により武王のうたせ給いけ
り是太公が智畧なり周の世は三十七代さき
こえし年は八百六十年なり文王を初めにて

武王成王かうさうちやうさう程王是迄聖代
と聞えしが幽王はりさんに殺大をあげし酸
愛の褒似が故に亡びぬされども幽王の御子
けいさう世を興しちうかうなりにけり貞王
に老子ありけいさうの代に孔子出天下を治
む文の道いよ〳〵御代もゆたかなり周の世
のたはりはたんさうの御宋十二諸侯と戦国
に七雄の世なりしを晋〻〻り是はうたゝ〻晋
の世は六代四十九年に成にけり始皇の奢ゆ
へ感陽宮は破れしふそとぎせ誅せられさゝ

ひも頓てうたるゝ其後項羽高祖の戰となり
て項羽ほろびて漢の世に天下のたゝしこと
百年せうか韓信彭噲張良紀心周発の身を碎
きたる故なり其後漢の王莽位を盗み帝
となり頓て王武にうたるゝかくて後漢の文
叔を後は世祖の王武として後漢の帝の初めに
て御末は十二代二百余年は治りぬ又魏蜀呉
の三王は後漢の酒よて三つとなる魏は五代
四十年蜀は二代呉は四代とんせいまやうち
んずいこうちやうげんみんこそつゞきけ

△十種名物

四代そう八世せい七代梁四代陳五代にすい
三世唐は二十世そうの世は十六代に元の世
は十八君ときこえけれ

名香の謏

一夫六十一種の名香は法隆寺東大寺遺遠三吉
野紅塵今ぐく中川法華經橘八ッは園城寺
にたり冨士の煙りあやめはんにや鶴鴫班青
梅揚貴妃飛梅種ゝ島みをづくし月龍田紅葉
の香斜月白梅千鳥ふつけらうばい八重垣花
の寃花の雪名月がらんす蜀立花花散里なん

の花がたみうるだき須磨明石十五夜月人の
名時雨手枕有明雲井くれふひ初瀬かんはい
ふたば早梅霜夜七夕寝覚とめ〳〵め薄江薄雲
のゆり馬

鉢輪通行謡

一けるや蜘の家にあれたる駒は繋ぐとも二道
かくるあだ人を頼まじここそ思ひしに人の
偽り未知らで契り深にし悔しさも只我れか
らの心なり餘り思ふも苦しさに責舩の宮に
詣でつゝ住甲斐もなき同じ世の内にむくい

東京博文館製

を見せ給へこ頼みをかけて貴布禰川はやく
歩みをはこばん通いなれたる道のまゝ夜
るも紅のかばらぬは思いにしづむみそろ池
いけるかいなき浮身の消む程こや草深き市
原野辺の露かけて月にそき夜の鞍馬川掬を
過れば程もなくきふねの宮につきにけり〳〵

小舞

一枝の枝にはひな鶴のすだつを見ればうごき
なき岩尾の方に居る亀の千代万代も限りな
きよはひは君がためなれ心も清き池水に

廣き恵みぞ有がたき

歌枕の道行

一扨も其後思いもよらぬ旅衣立出ずより袖ぬれて干す日をいつと白波の沉む浮身と成ぬこも東に残る妻や子は知らでぞあらんかゝこひぞいをで思いを淀舟のこがれながらも泪かな我れおかるれば誤り我人は何とも岩清水澄濁るをば神でしらん男山断り給へとふゝ拜み思いはいつの山崎や関戸の院を打過てうぢのゝあしの程へても帰らんこと

をかたのゝ京まゝろの雪を手にすくて業平の中將のかりくらしとながめけん昔の春も なつかしや袖に波よる渚の院江口かん崎打過て思いはつきヒ有明のかなふゝ宝や西の海波の煙りの杉原やかすむそなたは住吉かゝ岸におふなるわすれ草今の思いに種取て思ひをわすれてうしわのいける大物の浦より舟にのせられて塩路遥にこがれ行浮月を三つの涙なれや難波のさとに飛ぶ蛍思いにもゆる身の上と思い合せてあはれなり其屋

の漁の舩よばひ身にしみ渡る折かちに武庫
山おろしふくはらの和田の岬を打ながめさ
らしゐの色かさぞ見る五月雨に濁りて落る
布引やたきつ心をせきわねて袖くちわたる
さかてゐゆき〳〵の人のたげくれぞこまのば
やしに隙もなく心つくしの須ケの関もしゐ
たれんとわびけんも今身の上にしられたり
沉みははてしうたかたの淡路島山詠れぞ波
にくちせぬゐしまおばたが筆染て写しけん
身は深舩のよるべにもつゝならで見る空な

われや心ばかりはすむ月のながめ明石の浦を
行こはずがたりの古を思ひ出るもゆかし
くて千代のかげ見ん小松原うしや思ひを言
砂の庭上の鐘に音をなきてむろの泊りに身
をよせあまのうりわすもかけのせとすなを
なふんや世の中れ人の心はよるぎが関身に
こりつゝふ梓弓やよりの浦をこぎ渡りあへ
の浦よりうちうみ行日数やうゝ主なりて
備前の児島に着給ふこにもかくにも正景の
心の内無念ともなかゝ申ばかりはなかり

けり

弓場意恨の道行

一其後かつ秋の御臺所や若君は住馴玉いし屋
形をば泪と共に立出てけふ出て行衛もしら
ぬ旅の空きてこそ猶も物うけれ古へ人の
恋しき都いつか又あくる山あり
おもかけを慕ひつゝ矢田のいつる梓弓つる
こばかりを頼みつゝ
がの津にも身をよせて音にあらち山こえて
も露ちる秋風のなげきこりつゝはてしなき
七里半にぞつかれける此人今のあはれさ何

端唄

にたとへんかゝもなし
ぢそうの道行

一其後若君は塩津の浦より舟に乗跡ふり帰る
見給へば和国無双の竹生島金人り輪人際い
り夜の内に出現したる霊地にて胎蔵界の雛
天假に此世に鎮座なる弓手の山はすげ
の寺毒手はふなきの湊なる佛の縁に近江ぞ
と沖にかもめのつげ渡る浪も磯部に打よせ
てよはひ久しき白髭の宮居もあれに立たま
ふ龍燈の光さまし御奴を照させたまひける

若君これを御覽して感涙袖をうるおして順
風心に任せてわにのみさきや平の松かたい
の浦の舟よばいこれも何をか名所かな西に
高き御山はあれこそ日本天台山四明の峯を
うつさるゝ麓に日吉権現のいらかをならべ
立たまふ東はやつさき山田村八ばせの浦り
渡し舟とづ坂本のこなたなる志賀唐崎の一
つ松今も山王権現の御神木にて候と名所を
語る其内に舟は大津の浦につくろうちに丸
の心の内あはれこそ中々何にたとへんかた

もなし

義氏吾妻下りの通行

一扨も其後義氏は郎等四五人御供まして吾妻を
さして下らせ給ふいつかわが子に栗田口い
の岡峠打ちこえて大津濱過ぎひばりさゝず
るのちの里霞はうかねど草津の宿西はふら
ねど守山やしの原堤なるみがた見てこそと
ふれ淺山ゐち川過れば千鳥鳴くゝ木の〳〵細道
すゝばり峠は是こそかや立帰りながむれど都
の山は遠ざかる旅寝の夢はさめがゐいそぎ

絵くば美濃と近江の境なる寝物語を打過ぎ、
山中宿につかれけるに不破の関屋のいたびさ
し月もれてやまばらなる垂井の宿はわの
くに赤坂や夏を待得て熱田の宮何と鳴海
の塩干潟末は遠江の濱名の橋の夕潮に
もさしぬるのろる海士小舟こがれてものや
思ふらん心つめは夕まぐれあすきてあらん
命はさら雪の今は池田の宿に着袋井縄手を
行ば程なく日坂過れば音に聞く小夜の中山
是からよ比所にて一首の歌をよまれたり年

たけて又こゆへきと思いきや命なりけりと
口吟みたまい筏ながしす大井川島田藤枝鞠
子川てごしの里駿河山を打ふぶあ、こ保の入
海田子の浦年の雪ぶつもり年に高きやまさ
るらん伊豆の三島や浦島やあけてくやむ箱
根山なほろこびを菊川や大磯小磯を過ぎ、
鎌倉山を毒寺に見て武蔵下総のさかいなる
角田川梅若丸の墓印し柳櫻を植交せて念佛
の聲の殊勝さよ宇都宮に着しかば大明神を
伏し拝み今一度其を花の宮へ帰し給ばれこ

祈誓をめされ、東雲はやく白川や二所の関に着しかば、我れをばこめよ関守と、恋しき妻や子に會津の宿日出度きことを聞くからに、屋ないつまもまいらんこて、座ないつまして参らるし、清滝川のさがりこりをかき、御前にまいりいかに申さん、屋宝蔵さま三国一のこくうぞうと聞く時は、我れ等までも有がこくぞんじ、是までも参りし利生には、花の都へ某をかへして給はれや、此願成就するならば、こしこもり申さんこて、ふかく祈誓をめされうし、三

日こもり御下向あり、いそがせたまへこて、日数つもりて七十五日こ申には、奥州なごくの里に着給ふ、彼の義氏の心の内、あばれこも中々申ばかりはなかりけり

笛の段

一御曹司は籠が外ざまに、立忍ひがくをぞ聴聞なされけるあら面白の音楽や都までもあまたの管弦を、きゝしかどもかゝゆゝしきくるげんはふし、かゝるゆゝしきくるげんも笛のなきこそ不審なれ笛ばあれこも吹手がな

くしてふかぬかや。吹ばあれども笛がなふ
してふかぬうや。笛も吹ともありけれど惣て
東のくるげんには笛をばふかぬがならいか
や夫はともあれかくもあれ義経これまて楽
に笛をあはせんずる若もとがむるくあらば、
さんろかまるれ草苅笛と答ふべし重ねてこ
がむる者あらば源氏重代友切丸のつゞかん
程は打あふべしと思召右の袷の袂より被せ
みおれを取出し八つのうた口ごとあかの花
の露をて打ちあし楽はさまゝ多けれと男

ふうかるを忍ぶがくゝ女子が男るをこふる楽
中にも北野の天満天神のおしませたまふ想
夫憲れやがる我又尋ねかゝるさてゝこらで
んと去ふがくをおし返してはふもごし吹も
ごしては押返し矢はぎは闇ともならばなれ
こ半時ばかりぞこふかれける

四季のちやう

一御書るは浄るり御前の一間所にしのばせ給
入て見給へば四方の係るに四せつの四季を
ぞかゝれける。まんづ東の係るにかいたる係

は春のていかと打見へて二月末泳生初めの事なるに峯の白雪むら消て谷のさわらびを へ出れば杉の枝には孔雀風がさへづりて こりうそてりぬるてりまこひるゆこから や四十から数の小なる草をくふてあをたこ なくへこまり蓬あそびし其風情をかゝれた るは誠に春かと見えにけり南の隙よりかい なる鶯は夏の躰かと打見えて卯月末の躰みだ れ初めの事なるに斬場をふかすは葛藤草夜 ふかをかなるは時鳥なつのさまて、そふたの

空をながむれば侍の如が大このとすそをひ みだし背の、小豆をかなふけて早苗こゝそ やさしけれ日だに暮るれば我が家に帰り宿 の堀み火かき立てゝ軒端くゝにとつ煙り谷 へこかたふく其下にはこゝろぎはたおりき りゝす杉出すゝ虫柴虫常になかゆはたか らむし蝉のなゝ孝行々にいゝきゝこゝうし其 風情をかゝれなるは寒に夏かと見えにけり 西の隙ゝにかいなる鶯は秋の躰かと打見え て萩が上葉にそよぐ風萩が下葉に徒ぶ露九

月下旬にもみぢ葉の所々に散行風情をかしれたるは諸に秋かと見えにけり北の淀子にかいたる繪は冬のていかと打見えて遠山近き里迄もあらしこがらし烈しうて軒にたる氷ぞこわりけるつがはぬをしの一番羽をばこほりにとぢられてたゞぎる其身の風情をば日本名畫の繪書きの上手が附青緑青の筆をもつて繪具をしまずかいたりしを物にすゝ〳〵たゝふれば都に返りてはゞ〳〵で一条殿や二条殿近衛殿向花山の院六角堂

のかしの御所と申ども是にはまさるべしとも見へざりけり

當世都めぐり

一旅人は都あらうの名所旧跡さゞくをめぐりゝて見し程に東には祇園清水地蔵の桜の先咲ひるの羽の滝の底くれてあらしの花の数ちりて霞の内に雲のさへずる方を眺むれば彩日かゞやく豊國をふし拝みて行程に亜末の花も盛りうてあなたに近き大佛や三十三間ふ拝みー二の坊をうち渡り、稲荷の山の

青楓、そよみぢせば見んとばかりを契りつゝ鶉なく〳〵なる浜草山、松にからまる蔦の森打ちこへ行ばしづ伏や、大原のさとに比叡山、いつれも雪の降ければ、猶しも寒風はげしく、伏見小幡に打つゞき、彼の宇治川のせゝの島々なかむれば、ゆに乱〳〵る、大や、水にみまきのいそすゝみ、橋音に聞くハ嵯峨ふーおがみ、淀の川瀬の水車、めぐる命を限りにて、鳥羽に恋塚あきの山、むつだのうらの虫のゑもはやかれ〳〵になりぬれど、聞くにつけても哀なり、東寺四ッ塚かつらの里、月の影さす大井川、高尾の峯のもみぢ葉は、いろ〳〵時雨やそめつらん、小倉なゝ〳〵なるさゝがの、倉は、物さびしく音に聞く、秦の入相の、鐘もそびえて程近き、常磐の里に北山や、積る白雪踏ふて、心ぞそくもかぶ岡山の夕煙り、立ちのぼりしを見しよりも、一種の香ぞ聞えける、煙りたつ船岡山を、新しれば、よそのあに袖ぞぬれ、浸みしも、聞につけてもこゝはなり、貴船の明神、鞍馬寺、打こえ行ばしづはらや、をはりのさとに、

山さん、何れも雪のふりけれど、楠しも寒風は
げしくて、山より出る細道も、木の葉乱れて、う
づみけり、谷の小川も氷りつゝ、琴柔やかもあ
の忍び寝もだへくにこそきこえける、日の
岡峠に栗田口、かなたを遥かに詠れば、加茂
白川も見えにけり、吉田の宮立ちふしをがみ、
われもくと打つれて、都入こそめでたけれ。

高安通い

一うつろい安き人心、花になれしはそもじさま、
扨つたなきは妾が身にてとゞめたり、故をい

かにと尋るに、君と我が中二葉の松の末かけ
て、かばらゞこそ契りしに、いつの間にかは
秋風の、吹や絶田の山はすゝまゝく、恋所の有
ると聞くものを、おろかつか波のよる道こゝはあ
らんかくゝはわたらせたまふぞと、思いつゞけ
てかくばかり、風ふかば、澳漕白波絶田山、秋な
にや君がひとり行らんと、行末を思ふ心とけ
よ、その契りをこめんこゝやあかぬは君の情こ
て、打れ入その内に入給ふ。

吉原太夫えびすたらし

一そんもめてたいよいはい申よ、御代も吉原五丁には、我も〳〵と袖をつらねて、揚屋町に来りありける君達を忍びて見れば、諸国〳〵の国名かたぎり、丹州但馬對馬に因幡次郎がはやしてこゑをひゞかす、ろうす様こよ、初音様の一ふしなんぞに、しねとかいたもことはりや、初又めいよ不審によるか、かなつてくつゞ揚屋もよろこび申よ、朝妻のかぱり清十郎はしほらしゆ、そんかくもりもわたらせたまふか、雪丹の君こよ藤波の、ながれにうかむつ

（着り上手ブシ　桜川ノフシ）

ねよ初音の、初島鶯聲にて歌をうたへば、まれにあふ夜はたまの〳〵のこの名高尾様の御なりふりは鎌倉の御所の前で十三の姫かしやをこゝく吉野かふしへかくもげつてないかど石あられ、けれど、さやらのらんきよく玉よの君こよ、あなんかつらにふるなの初瀬いつも常磐に、松が枝狭衣、いこしほらしきはかしをにかよも、吉岡外山あれ見さいや、是みよしの、住の江大阪此君達の、一ッ所に参り合いて、御酒宴なんごもはじまりければ、おもひ〳〵

の紋盃にて、加賀に菊酒いづみの御酒にて、類も御ぎない、右京石近にかさなりてよべは、盛世まんまも呑み明石様、御酒をまいれとゆふ
ぎりさんゆそこで與七郎にお肴こあれば
四の貢尾紙く膳ひをいて馬に打乗てけさと
へ来り、門を叩けば亭主はまをせす、あんたるさ
らいたな、

當世はやり歌文

一柿はいきよめ奉る、愛宕山には大権現、吉原
三原にあうじゆん坊、冨沢町にはときわけぶ

車長持は贅
天和三年正月十九日江戸大火
文まり禁せらる

慶安元年七月十九日江戸中ノ風呂屋ヲ禁ス

ん、古かねだふにはふこうをふいて、なるんべ
立たる莨菪盃、小傳馬町まは車長持なるかみ
ぶん、薬師堂前には、かんこうどうのわらく
ぼん、博労町の裏屋くか顔人坊、具付の場に
おたちなるく代侍代参り盗人ぶん、横山町
には地打に打たるくまでんわう、乗物町には
乗物ぶう、堺町にそ風呂屋くをのぞきん坊
浅草河岸のひだこ入道いつぱりぶう、紙町の
かしにはゆるかの大どんぬかをけぶん、小伺
町には小船をこぎよせ、行徳までこ人を乗せ

傾者田
めつらか
以五化の
そと高市の
傍に解せり

事ぼん、新搗ふてはわらんずはいて、上下をせ
んこて侍かけぶん、たちうりては奈良物眠搗
賣ぶぶん、萬町にてさるとんぶう、めつた町まは
びくにおう、日本搗にはあめうりこうまん、是
程おうきぶん達を、御清おろし奉る、

吉朝だ夫祭文

一柳御清おろし奉る、先々びやうじやの名ふし
あふ、愛宕山より高尾様、大峯大せん千手さま、
其外山岳の名どりたち、種々の手くだた得た
れども、今の上手のをもざしを見しよりよね

んも社の初瀬明石と名はよぐぐ、はぎの白き
に心をうつし、伽羅を矢ふしやうきんぶう、な
ごはあやなし金をもて、いつも見あかぬ江ぢま
ちの、巴ときけばなつかしやふじへせうしう
其姿、淋て見人こてすみTのまききのかつら
長き世の、憂世をねて彩畫の初春にもゆかし
かるも様いとおしらしき夕ぢ方の、峯の嵐のや
れ松風かぞてもやさしき物ごしのきよく閑
ゆりたやう様心は吉野の山にこそ咲は初
花八十郎、かく金盃の君達と、せあて世の恩

ひでに、一座二座もさんしゆ様、此君達のまも
らんは、つきし生霊ともあらじ、病者の命は百
百万世と祈るなり、いきみたまのこさんしゆ
ぶう、其身は長災延命諸願は成就皆願満足敬
白

野良祭文

一抑くもんしゆやうむらし奉る、先々野良の名に
しあふ、愛宕山川内就殿、勘三瀧井山三郎其外
あまたの見物衆、今の名宮のおしざを、一ト服
見くらべよまねんも浪の内花の歌の自きに面

を出ふ久米作、春なら夜ごも此君の、髪に花井
岡三遊、楓井つ弥と夕月の、髪はあらで光りあ
る、触出東島のこざらしを出るにあやなす金
ぎくと、いつもあるかぬは初ろ夏節をこめたる
竹三遊、誰を見むとて上村の、掃部の服にたい
ずみて、猶ひそかにこうにこそ、ようもみな
き皆三助、いろつくしき小きんの君、初も利
発な相ごとの、清く閑ゆる文三郎、心より川楯
十郎、咲や花咲石近殿、かく金盃な君達こそ、め
てけ世の思ひでに、一座も二座も山三郎、此人達

の守らんは、何の恨みは有明の、つきしいきり
やうもあらじ、光りをみがく玉村ぢう、其身
長寿延命諸願は成就皆領海を敬白

江戸まんさい

一こくわかて御まんざいこちにやく御ま
んざいこ四海の波も静かにて、国し治る御代
なれば、かゝるめてたい寛の君の、御城づくり
の結構には、門々な六十六櫓々の其数は、玉を
つらねた如くなり、かゝるめてたい寛の君の
御在所なれば、町の数をかぞうるに、名のある

町が八百八町、之外数しらず、寺の数をかぞ
るに、一万三千三百三十三寺なり、やあ斯様に
めでたき寛の君の御在所なれば、六十六国の
守護の神達のまつはらせ給ひて、屋形を立て
ひつしとゝうて、君を守護し奉れば、ながれの
末の我々までゆたかに栄る嬉しさよ、其後寛
の君はなかき座より、上りて見れば、いゝ煙
り、民のかまどにぎあひけるこゝろあらこと
び候ければ、誠に国出たうさゝらひけり、其後
寛の君の御在所なれば、南おもてを見わたせ

壽量品

は、南はくんだり夜叉、是も浄土の三部経海の
面を見渡せば、西国四国秋田酒田さいけら国
津軽八方外ヶ濱は、数おゐて、唐天竺の宝船に
あまたの宝を詰めこんで、お江戸の湊をしか
ふたらは、誠にめでたふさふらひける。東は観
音菩薩、西は六社の大明神、宝の君の南面を御前
の佛はどれ/\ぞ、同じく法華経のじゆりや
うぶんにおはします。じがとくぶつらいせ
きやうしやうこつしゆむりやう百千万億さ
いあそうぎきやうせうろうきやうけむしゆ

陀羅尼品

おく示まりやうだらぶつごこう如来むりやう
からいごしゆじやうこゑうべくげんねはん
たちのまつばらせ給いて、御番を勤め給ひけ
り。北の方はどれ/\ぞ、同じくねつきゆうの
八の巻たおはします、ありなりとなりあなろ
なびくなびいてびいてびいでみんいてびあでびい
でびてびびくろけいくだけいくごけい
くあしゆらかつらきんならまごらかびく
くにうぞくうばいまんぴにんごうたち
のまつばらせ給ひて御番をつとめ給ひけり。

提婆達多品

陀羅尼品

東の方はごれく、おなじくおけ僧の五の花
にたはすまず、いつしやふ。こくさぐん天王
二しや帝釈三じやまもう四しや天りんしや
うろう五しや仏四達のまつそらせ絵いて御
書を初め絵いけり、西の方はたれく、一めう
らんば二めうびらくんば三めうこくし四めう
けし五めうこくし六めうだるつ七めうむろ
んぞくは八めうじよくらく九めうくもらない
に十めう達のまつそらせ絵いて御書を初
め絵いけり、いよく、お江戸は七まんざいこ

東樣原製

やいわれ、おくれなく金がまいつたつれ
ぶしにまいろうろい、富年ふく、若水かわり
て大ぼんにゝ判にたんざくはやぶきすなか
ねなんぞを、みやこの車牛にしつかとつんで
あんから是まできりくまいりはすべ
まなくこうぶをなくかくめでたい万々
をいつまてさまおうやくたのし、

大峯入り事

一かるめてたい祈からなれば、都聖護院ご三
寮院との、一世一代の大峯入を見申に、昔元ん

の行者の流れを汲て、山伏の水上なり、諸国の山伏達をしぐして、大峯入は誠に殊勝に侍ひける、初又扨の中をあらゝ見申に先一番の扨の中には、大せうきやゝを入られける、扨二番の笈の中には、金剛経を入られける、三番の笈の中には、三部経を入られける、四番の笈の中には、大般若を入られける、扨五番の笈の中には、真言秘密を入られける、六番の笈の中には、独鈷錫杖いらか珠数を入られける、扨七番の笈の中には胎蔵界のまんだらをこそは

入られける、八番の笈の中には、星曜にらんてん鐶の鎧を入られたり、扨九番の笈の中には浄土の規式をこそは入られける、扨又十番の笈の中には、十方諸仏諸神を入られける、十一番の笈の中には、那智の山より飛来る天狗のはがいを入られける、十二番の笈の中には、薬師経を入られける、扨又廿五の裝束は思ひくの裝束、ときんなぐわけ、螺の貝、金剛杖をつき、大峯入らそ同えけるは、誠にありがたかりし次第也、

吉原名所まんさい

一あ〜たのもしやと〜わかたに万屋こ君栄え
まん〜ますかゝる名所名所拾くの御めん腐
ぶりのいつく〜しさよめいたいなのんたゝ〜
拾るの前にまりて、ゆ全集いよゝめられし
はやぶとうけたあらいで、一とまんが滞
上ら〜ちんぞいやふうのはんこやうに
てもさつちはず昔役のゑ町の御ぼ初流っ
吉原ならんこ、二人なこうくなったいに来
りてせいてのわりて百万ゑ、てつくはすめ

（つゞく）

前の文

てちちんわういちかける世後墓九が拾ゑ三
四がらし天神にわたりて大はんしやうの
六条をば島原くらされけり其後にくわか
に御万寿ぞや、まんさい〜初春に正月かい、
きさらぎ弥生花見かい五月はあやめの節句
のい、七月になりぬれば七夕の星会八朔はま
ぶゝい、九月は市ゐの菊宴ねやれさいゑる七
様と八様とくぜつがいできたつゝ是はふし
ぎな事だ是程よい中があんなる事だされば
七様つまらぬおんのみゝにかゝるやうな

前の文

原本六を大の字に書けり
御草内大ハ六ノ誤
六条三筋町
寛永十八年
今の島原く
移されたる
事なり

ことばかり人中でだしやる。已れはいらう腹
ぐ〳〵つていの、初音様へそう〳〵きつ、何を口
舌おしやるえいされば、かゝ様閉のしやれけ
中もえんりょかくるやうなことをしやるきつ
う腹が立ますする私は初りますするさらばや已
今已れが誓ふくにつうこわらつてたも
やこなたの其様たしやれを、おれも腹が立
なれぬめでたいは此めてたいがめでたいは
扨もめてたい〳〵まんたらこ〳〵やれさい
若中の町に大ようせがある閉だ分夫が異な事

ドやおてきはたれ〳〵だまづさゆん様山様
ど様なんびんぢば様おもたいなりていやな
ふうではないのいの扨も〳〵おびた〳〵しい
なんびんの集まるおそ達はたれ〳〵ぞ先
吉野様かわ〳〵様初音様小房様柱本様小袖か
いらうわそ結の雪洞揚屋のかゝへちよろと
ん〳〵なこの万巣〳〵千年の御祝ひごつ
ばいやろのい
野良まんさい
一徳者に御まんちよとよ君と境町にます

東京博文堂製

掃部頭

かもんのかみでたや、田村の君の広ふぶりの結構さ
よ、名代の味ざやこきんの前に至りて狂言を
そめられける、狂言に面白は、一に力身しなせ
ぶり、濡れて品よのおつこう者うてさふらひ
ける、皆之介顔げせ見にくくは布引の滝井
山之の御寝ころすうくぶつさろすかなり
もふりもすおかの多門の松井御部清き玉
井の水はわかやぐ木の葉はえる浅之丞の御
姿又も世には出来島こざらし様の御ふりは
田舎見事とゐあらわれて、武芸がやうなるちん

すけなんごて、鼻毛にこんぶのなぎさふらい
けるは、誠に名誉でさふらひける、昔かんのか
ぶきをごりの御ときかんみに彦作さうにん
は二人は次第にひろまりてかくる繁昌く
くは十六文かくるはんくやくたておわて
初めて狂言演よりけるまちりも千世よ露の
九高之めでたや行くゑ迄ずの舞ぶり流れも絶
えせぬ玉川の主膳の舞事さよ坂東の末
なるく光りをみがく玉村の吉治様の扇の手
末演今ときさかい町氏のかまども振ひて写貴

や長久こようらびけるは、誠にめでたやさい
わのはやせやまんさい〳〵まるやつぶいて
く中村の作法様さきの川の八十郎六郎吉郎
流の五様みきの舞もち更後ちが境町で御
ざる、そが竹こ五を敷の曲かはじまつて〳〵
を敷の曲にのまんざい〳〵是を更後る供
元のたごりがはじまつた花は吉野紅葉は高
尾月は実科浦磨明石を更後でちらかいて
まんざいく、なふを更後ちが勘三郎鞠の曲
ぢやまり踊て見れぢなあさんさ鞠ぢあたり

て天と面白やこりやなんだるこんだ扨も
〳〵てつからかいて万歳〳〵なふを更後ち
ぶ玉川と腰さる若山三郎がさんばそうが初
まろ〳〵千歳乗や万歳乗ふ年の御祝ひやいた
のし
四つ世ひきもつて
三つ面ちつて
二つふしつけさよど

昔大黒舞

一御ざつたら〳〵福の神を先に立て大黒殿の御

ざつだ、大黒屋の社には
一に俵ふまへて
二に小つとり笑ふて
三に酒をつくつて
四ツ世の中よふして
五ツいつもの如くに
六ツ宝高島屋に
七ツ何事なふして
八ツ面白をひらめて
九ツ小紋をぶつ立て

十でこうじおさまつた、
大黒屋をみさいなく

中古大黒舞

一所ざつたく、加賀守を先に立て大名流の御
ざつた、大名流の社には
一に俵おさへて
二に仰山な高ひし
三に酒を作らせず
四ツ世の中ちがふて
五ツ伊豆ざさし出て

六ツ無理なる仕立ホ
七ツ何車ありそうで
八ツ屋敷を焼はらい
九ツ米がたくのふて
十でこうぶこまつた
大名籠を見さつなく
西國巡礼唄ホ々
一壱に紀伊の玉那須
一ふたらくや岸うつ波はみくま野の、なちのを
やはにひゞく瀧は流

東京帝國大學圖書館藏

二壱に紀伊玉紀之井寺
一ふまさとをはるゞ宮にきみわ寺、花の都に
近くなるらむ、
三壱に紀ゆ小川寺
一父母のめぐみも深きこかはでら、併のちうい
松ゆーきかな
四壱に和泉のまきを寺
一み山ぢやいばら打泉わけゆけで、まきのをで
らに泊るそいさめん、
五壱に河内高井寺

一 まゝとうり板をかゝるふぢ丹ち、花のうてな
に むらさきの雲

六番に大和のつぼ坂

一 岩をたてゝふるをだゝへてつる坂の、庵のいさゝ
ゝ浄土なるらん

七番に和泉をかてゝ

一 けさ入れて家ちかでらの庵の紙、さながら瑠
璃の光りなるらん

八番に和泉はせてら

一 冢なれまるこゝろは初瀬寺山ちかいも深

き谷川

九番に奈良の南圓堂

一 東の内はなんゑんどうにかゞやきて、三笠の
山にはゝ雲

十番に山城宇治むろ

一 すゝすのゝ月を見むろこわけゆけど、宇治の
川瀬にたつは白波

十一番に山城上のだいごてら

一 逆縁ゝゝゝらさですゝゝ形なれば、巡礼道ゝた
のもしきかな

十二番に近江岩まてら

一みふかみはいづくなるらん岩寺きくうつ
波は松風の音

十三番に近江石山寺

一後の世をねがふこころはかろくとも、佛の海
ひろきく石山

十四番に大津三井寺

一いつくしや波多の月は三井寺の、鐘のひびき
にあくるあ海

十五番に京今熊

東慶寺

一昔よりたつとも知ぬ今熊の佛のちかひあ
らたなるらん

十六番に京清水寺

一松風や音羽の滝は清水の、むすぶこころは涼
しかるらん

十七番に京六はら

一おもくこそ五ツの罪はよもあらじ六波羅に
にまいる身なれど

十八番京六角堂

一我が思ふこころのうちは六ツのうど、たま

るかれとゝのゝ枝ごゝ方を

十九首に京からごう

一花おりて今はのぞみのかう寺にはの木を

も寄りなるらん

ホ首にちやゝうしうよゝみ侍

一雨をてる雨ぞ山路にもかふ雨のそらゝうみは

ゆりも時ゝ夕だち

ホ一首にあなう

一かゝゝる世にまれ近江のあなたはぬこゝおもは

でたのあナこゝ名一ゝゝ名

ホ二首に播磨の玉そゝせんじ

一をしなくて宮ゝいやしゝゝ宗善寺ゝゝのち

かゝ枝まあはふし

ホ三首に播磨かちを寺

一むゝとて罪を祈りをかちを寺佛をたのゝ心

身こそ安けれ

ホ四首に播磨の玉中山寺

一聖をてるぞゝさとてる中山のゝてらくまるゝ

も後の世のため

ホ五首に播磨清水

一あはれみやあまねき門に数〳〵となにおふ
海に宮に清水
廿六首に摘歌ふらくさん
一はるは春なつは花たちばなあきはくさ〳〵いつもたえせ
ぬ法のはな山
廿七首に摘ぬさよしやてら
一はるゝ〳〵とのぶれば花もよしゆの山嵐松のひ
びきもみのりなるらん
廿八首に丹後のふるあひ
一海のゐ松のいでまもなうあひの風吹そゝ

あまのはしだて
廿九首に若狭松の尾寺
一このかあは霞世界めらん俗ゐをば忘こ世を
宮に松の尾のてら
三十首に近江竹生島
一月もりも波まに浮ぶ竹生島ふねにたからを
つむ心せよ
三十一首に近江長めいじ
一やちとせや柳に長き倉でらはこぶあゆみの
かゞしなるらん

三十二寸に近に観音てら

一あたうこと遠行給くらんを人寺、遠き国より

はらぶ歩みを

三十三寸に長流のたにくみ

一世をてらす仏の京しありけれど、みこと遠慮

ごともきこえぬなりけり

一弟世のいつ日寺にたのみなく、水はこれよ

りいづるたにくみ

一けさまではおやとなのみしたゆつりを、こき

ておもむる長濃のたふくみ

坂東順礼品々

一寸に松本十一面

一頼みあるべくなりけるに杉本のちかひ大悲

の世ますかはらし

二寸に高の岩戸十一面

一立寄りてあまの岩戸を押いらき、天とけを大

のむ我身なのすし

三寸にたどろ千手

一まよいしかくはさきたちひきのやつごりに

かはるはたしろ寺かな

四番に長谷寺一面

一はせ寺へ参りて泳を流れぞ、由井の江に立

つは白波

五番にいしずみ寺一面

一かなはねをたすけ給へと祈るに、ふねに宝

をつむはいしずみ

六番にやま寺一面

一いやまてら立そめしもうつませぬは、入あひ

ひぐらし打ぬのおと

七番にかなひ仏くらんをん

一何事も今はかなひの欣世音、二世あんらくと

なれかしのうん

八番にかしのや仏観音

一さとりなすまよひの宝を吹ぱらひ、月もろと

もに拝むかしのや

九番にたくとうじせんじゅ

一きくかちに大悲大慈の志くとくとぢちかひも

こもにふかき岩戸の

十番にいきの岩戸千手

一後の世の道を引みの欣世音、此世をこもにた

すけなまくや

十一番にすみ岩戸正観音

一すみとあるの岩戸を押のらまい大意大悲

のちのひなのもし

十二番にさをんじ千手

一さをんじへまいる願ずしたのもしやうかぶ

げしきを見るにけてもる

十三番に法華観音

一ふかきごがごとう法はよもあらじ罪深苦く

まいる願なれば

十四番にくみやうじ十一面

一此度は君の仰せのくらやうじか江戸ぶ川を

うらに見て行く

十五番に白岩十一面

一なれもみるいのる心はしら岩のはつせのち

かひなのもしなり

十六番にみつさ千手

一頼みくる心も清きみつさるの、ふかき願いを

うるそ嬉しき

十七番にいづる千手

一古里をはるぐ是へ立いづる我が行末はい
づくなるらん
十八番に十禅寺千手
一十ぜんじ上りむかいのえる湖の、うたの浜ぢにた
つはしら波
十九番におかわや千手
一名をきくもめぐみおかわやの観世音、みちびき
たまへしるもしらぬも
廿番にさいみやうじ十一面
一さいみやうじちかひを家に尋れぞずいの住
家は西とこそきけ
廿一番にやみそ十一面
一まよふ身が今はやみぞく参り来て、わたしの
光り山もかゞやく
廿二番にさたけ十一面
一一ふしに千代をこめつるさたけ寺、かすみが
くれに見ゆる村雲
廿三番にさしろ千手
一はるぐに上りて拝むさしろ山いつもたえせ
ぬ松風の音

木四番にあまいき延命

一常陸なるゐとけの山を打こえて、あまいく寺

こいそぐ　此度

木五番にあふみとう千手

一あふみぐうかねは　竹波の峯にうえて、かたゆふ

くれの國ぞ　こしき

木六番に清瀧山観音

一我が心今より海にごらじな　清たきぐらく

ふるかなれば

木七番に阪沼十一面

一此程はふるづの事聞いて沼にきくもならば

以波の音かな

木八番になあ川十一面

一をとにきくなあ川寺のげさがふち、あみころ

もにてすくうなりけり

木九番にちば十一面

一千葉ぐらくまいく我ぐるもたのもしや、岸う

つ波に舟ぞうかべる

三十番に高倉山観音

一はるぐとのぐりて拝む高倉やふちにうつ

らふあさはふ〳〵らん

ら十一番にかさり十一面

一日はく〳〵雨はふるの〳〵通すがら、か〳〵だ

びふぞたのむかきもやし

ら十二番清水千手

一にごるとも千尋の底はすみにんり清水ちる〳〵

むすびあるおけ

ら十三番になこし千手

一ふだらくはようそにはあらじなこの寺、岸うつ

波を見るにつけても

思ひくとき木やりの

一やれかんかれ〳〵是て見て大ぜもふかぬか

あ〻の唄は売ものえよ所ではないのとの

じやはざりませぬ桁をはる風じやちん〳〵

かゝりのちんからりこうつて瀬戸の橋の音

ようたる野の駄敷たまるかにまてねて打を

いてなふとのこ夜明の滝がつくばつてん〳〵

ちやん〳〵すわゝいやりつろ〳〵ぞろう

〳〵〳〵ちとついやはいやとつろろうちやう

ろかねが

秋の夜くどき本やり

一初物うきた秋の初の君を松ちくつるむし一

よばわりはきりぐす二枚もさんやに君は

かうろぎをいのけ中の綱こゑをかけよやあ

れさきのつなぐい

吉原たゆくどきすやと

一ゑひきりつきりこしめかけやれたてまつの歴〜

本朱国本ゝ四会言ちの方じやが今年初めて

吉原〜来りまして三浦四ヶ花がみ内へやん

やくにさ〜れまして高尾の紅葉に逢ました

が吉野様とは皆様も御ぞんじてはざりま

んしよ志賀の白むろ花紅にかづら唐崎雲棚

引寄るあれから見返いやハ橋様やさらく

さつとた敵をたのんでくどきすまいた松枝

のたゆ様なさけたこ三ぬさかたにまんたふ

たゆまきき小様のやごやゆき

にはすじてもじてもたなでさらてくせは何し

あぐるい癖のないが返紀じや京のふうが千

くど四会のふうが千くどお江戸のふうが千

くど三千人のふうたちが寄会淀会洋宴でつ

くり育つたおこちで癖のないが道理じゃ
いかな有頂天の通り者のやぶさんなんこも
此君にあのまつたくはふん沢くはなり候ま
いといつたらロ説になりましよかあいのや
うてはゑ点かすのうとものつるいよろい
　　壮良くどきあやり
一ろいやろつきりと志あかけやれ壮郎の歴々
なる東国えは四人宮方の者なるが今年初めて
堺町へ来りまんして中村甚左へやん
やくにさそれまんして山之の君に逢ました

がたくあ様ごりは皆様もほぞんじで御ぎり
まんしよ阪井あづまに市村中村玉川流れ海
つてあれから是までろいやふさらし様やさ
らさつと左親をたくいて親しすまいた
山川の内記様情はたた近にた膳様おきにお
つた掃部様の寝や帰りはすじてもじてた
なつてわらそくせはなたもくせはあさない
くせのないが道理じゃ京の役者が千人こ大
坂の役者が千人こおつ江戸の役者が千人ここ三
千人の役者達が寄合談合評定でつくり育つ

たゝこたちで癖のないが近所じゃいかゝ有
頂天の通りもの〳〵銭なしなんども此君に逢
ひまゝならばふんぞりはなり候まいかいや
なゞちんきなり候まいといつたらロ説たな
りまゝ〳〵あいのはやゝは合点うよのもと
のつないよゝい

春駒くときあやり

一やれおいかけはやさめろおいかけ中の掘ち
めて見よさいてゝなゝらのひやゝしにてち
んころ〳〵ころ〳〵とひやゝしをそち

へて頼むぞゝいいさあやゝ若い穴ようきゝ
む心は春駒のえとゝまらぬ風情して面夫の
日に春駒は庭の梅につなぎこめ駒がいさあ
ば花がちるいさあは駒がゐるがいさ発ば花が
ちる花はちりても幸を待てくる春を芽を
出す思へば人間一盛りげでんの内をくらぶ
るに夢幻のゝ〳〵なり物語の庭とかすはあ
すをもしらぬ身を持てたはれ遊べ夏の涼
世においかけ中の掘ち偽いかう見事ようゑ揃ふた
四つの掘ち他ゝいやゝ〳〵ゝいやゝゝのち

もさ〳〵か小六じや名上名いとこせの四つ猫名
やや名いややら〳〵の名い
きり〳〵すくらきあやり
一やきき足〳〵すく〳〵鳥〳〵べきゆでは吗もせ
で君と枕じゃ其中は梅に雪花に水嫌ごりべ
し比翼連理のなかるたに何ひきれ〳〵とな
くはやなすやきり〳〵すの心こづらのこん
ふ〳〵さよをいかけ中のつけから見人車よふ
そらだやれなかのつなよへ
敷物揃くらき木やり

一やれをいかけはやさぬらやれ十七う〳〵こ
こしはじめて家つくり破風は白銀軒瓦金東
きを窓ぜたすだれぜたのめ事は光り輝くば
かりなり七まと八まと九の弓に変たる畳は
ぢれ〳〵ぞうんけん綾べり縁に錦べり高麗べり
をばまつさきに材雲立てぞ敷かれうりあま
りて足らざる所まなさいたる皮はなふ〳〵
ぞ毛氈帝の皮豹の皮をばまつさきに毛氈を
揃えてさかれうり三間角うし床の間にかけ
し本尊はぢれ〳〵ぞひ畏道ぐ達磨に東坡ぐ

牧溪ならん

竹よりは比都しそばやる　牧溪　和尚のあそば
した黒塗の観音三幅一對さらりとかけ秋も
半のことなるに北風そよぐの吹けれど金の
軸との白木の軸とくのごもうちは寂然き
やうしやのきんのさらふるものつそうく
島くいとき木やと
一やれをいかけはやさぬるをいかけ中のとあ
てんよ角をはるかに泳れば南はいつも夏に
似て洲濱に池をからせつゝ池の中にて蓬莱
ふうだやうるいぢうとて三つの島をぞつか

せつて高より陸地を泳れば唐土を以て小及
指をかけ指より池を泳れば唐南くまちち
よがうつる紅浦高の郎が汐の紅五色の糸に
てつふがせてぞやうらくかぜうの風ふうば
汀へよれこつないどはいつも夏にたおてん
こうたかい御ぎらぬおいうけ中のつなならぬ
えん車よりそろくぶれ中のつな

楠　くすのき

一やあれをいかけはやさぬう此わけくどいて閉
すべし是のお庭の楠木に色よい小るが巣を

くいてあれ何なりと問けまこで寶をまねくや
うか鳥冨士の高根に宝集して万の寶を美に
みんて拙梅あを紅ようくせ今おろし白かねの
帆柱に黄が初のせみをふくませて後と錦を
帆あかけてまんのたわら俵永につみ思ふ湊
へ今つけどころふくのみくらに寶納ゑやれ中
のつふふく

鬚者くどき本やり

一名いやさら〳〵やさら〳〵さつとそびきだ
いた大病のやまいしゑやう病は三十三色ねた

にいら木乃伊の訓
びり、賸汁のモ羅甸語
うにこれる一角のモ
口上

ゑは三年三月じゑや腹がかんけで虫氣で腹氣
で疾氣でうつけでたゑけで病がぬけてのゑ
んほゝなんでも芒は紙なゝものい豚を西てゑん
ゑばあたまの虫が千足腹の虫が千足せなか
の虫が千匹三千足の虫どもが寄合談合評定
で朝食前から夕食前まで むしをつゝきちち
かいて仰ろつつ 天ろつつ
御典藥の道三に竹菴にさかいのト養渡辺玄
吾ゑばぎのさゆんあん道永道竹佑齋なんど
ゑ木乃伊いらにびゑゝにうにかゝる 瑾婆ぼの万病

園に大はの絵のあうがり齊菜へいさらばさ
らにさら〳〵とゝいじもなんても見はくたで
るべいこちかたそそんせぬ事余方をかせ
いて心静に腐治をめされよおいかけ中のつ
なゝ

道盛くさとさまやり

一やれ道盛は〳〵小宰相の御君に思いをふか
くかけ絵い文玉章数〳〵らず或時久をおかへ
しあるそこで道盛の御なにやれ我恋は〳〵
細谷川の丸木橋ふみかつてはぬるんる

〳〵〳〵神ぐれいかけ中のつなでゝ
西行くときまやり

一やれ西行う〳〵諸国執行に出るとて尾張の
国に閑えたる熱田の宮にやすらいてかほど
涼しき宮立を誰うたあつたこつけつらんそこ
で明神法迦奇にやれ西行よ〳〵御身の名を
は西へ行とかきつるに東へ行は見も西乃が
偽りのおいかけ中のつなからこんゝをかけ
やれなうれつてよく
北地之神くどまやり

一やれおいかけはやまぬかのとらう小ぬて天
満宮菅丞相の御代のころ時平の大臣（ヲトヾ）讒せ
られ筑紫の博多になかされて憂きの思ひを
なぐさめて餞り都が恋しさに都の方を打眺
め一首は斯うこそ詠じけるやれ東風吹かば（ナケフヽ）
匂ひをおこせ梅の花あるじなしとて春な
らうそおいかけ中りつなぐい

八島くらき（をんごく）奇

一我は遠国茅深き柴の庵りを立出て今夜此夜
四国行脚と志すゐいつくも山の習ひとて

東京樂原製

ゆくをきらうのの細道をたどりもどりに行程に
旅にやつれし身のなりひさい我名をなれら
さらかさの蔦の仮寝の夏の間にゐい人目を
つゝむは庵ぬが浦とよそこで旅人わ歌には
妻はこゝよりこゝやさかいわこにかいるをつゝへ
は身うゐそる国にも都のこゝふくろくにちご
う山嶽八幡山が尺迫せは四国天王一の宮ゐい
春日の里にさかさ川亀田池田を打るて家は
讃州志ごの浦ゐい名はのり殘す彦崎のゐい
あまゆく里彩珠寺近き度の山里にそらいは

けーきやくりふ嶽とよのわる禁にすきき寺
ゑい立こゑたぞし宴やかしこの古にたゆさ
き打浦あゑい八幡にきけはなかゝに誠古
へ源平の舟とゝなぎさの戦いに澳はる家の御
陣よりうやをこゝは能登守續く味方は大友
たゝまやう蒲地京四郎浦業松をなきさによ
せらゝゝ陸は源氏の御陣よりゑい弓かけよ
せて奥州の佐藤兄弟次信に能井片岡伊勢後
河武蔵海尊三保谷はゑいさのぎを刈り戦い
し澳にまはらの拠引に澳のいかゝのあら磯

東京博覧会

にゑいよせくゝ波の音流て拍すさまじき檀
の陰ゑい心をつくし肝腸しをを如何うと尋
れば君に御恩は次信よゑい名を高松にさく
の金今は名のみ殊しつてゑいかゝみの石に
つゝゝゑゑいきてんよゑいやゑい芦は馬
侍のつらね給しあそかしたしひともゑい今
迄はなからくしををすてこそ名をは次信
とゑい涙しもことはりよゑいげに名を惜ひ
ら所ははなれもかくこそあるへしこ流をわ
びし打浦あゑい昔しも今も末代も天下四土

安倍に国をしづかに治りて御庫ひけだの庵
づくひ強ひ久しくまさるはふうれうなるみどりにて
たいまはひは君がため山れはなうまれはわれは
いそるのはふたいそれれやうたいめてたの
れ江をくとき永の奇
一我は遠国草枕き栄の庵を立出て今度は度な
江戸行御とゝのさす音にきこえし日和南を
遥に泳れは天下の武将御住なきるたい御城
様の見事さよ金銀瑠璃の珠玉を張かゝねあ
けたる構図は雲につらなる有様はたいそう

大しの奏の姫皇帝威陽宮にもれとるまゝ
い天人の面ゝがゝも日和朝暮にありぬやと
異香くんじて花も雨りたい咲数花の様四や
麓をならふる家作りたい天下のこゝろぬ清大
名君を守護し奉る宮にゆゝしくて見つばげる
回ゝくお城の山つゞきれにわれを極流て千
代を重ぬるためしかや我にハあゝねど紅葉
山たいあたりの川を誘れば留りさゝあぬあ
しをれふねも入あの数々に波の紅奇うゝひつ
礼音のふゝこそ面白や天下かゝやくお旗本

お若い衆のぢろ達の肩にかのこのだんだら面猫に浮世のめりすじのふ腹巻や腹いたやえい〳〵さるの浦涙にふさぐ山とてなるあるになぜにそなたよりやるかないぞかうろの音は降もなすいさごにねぐる水をも人をもさらにはぐくみらずつばさをふらぐてむれ居たり諫鼓も若深ふして鈴おどろかずとも云つべしやらん〳〵めてたのんえいそりや若枝

若衆くどき 船奇

一えいさきの屋の十八りに新吾まいらしたれは板中の〳〵まつ板中てあるよい若衆にひたと行あふたの我も若い時はれにちり為五年も十年も打にちり為かいつきひつはきはなすまいを思ふたれは人の妻なれそのいて服くしやごんたしやてんはちわさくれ浮世に一分五匁一さきは間の板金てうすのこにはのりかへしやのなるも為六年六へのなりにあらせ〳〵まはせられて〳〵ぬる〳〵今もどる一期ぢやそもしかく思へはのひえい

この菓も

鳥さしくとき 松奇

一やんらめてくいの春の梢にひよどりこまり
てさえつるやうは天氣よかれぞなほもよか
れがなこわちよかれうなしゆくしやもくち
やうさんをやさうたるちんはらくともさ
へするわをさいとうさしのさいとうわうか
さくはやと思ふて竿は結のし梢を言し前な
るわ石でるをはらくばつと返て飛ふ所
をちらでさいておつとりた勝のなるへつく

人なるちんなみちぎうきだんならびやうし
ねぐきつたにきりかくやくひやうしのふく
らりひやくしの孫の彦のやしやら子のひま
ごゝゝ小鳥をさいさ所を是をおごろどやたか
のゝ程めてこのんたいそれ若枝ときかゆ
るのんたんくはもし

おもひ物くどき奇

一たい宣いものにらうては主の御恩に父母の
おん流り菓問にお乳のくの菓物朝鮮人の長
刀下手の謡に上手の醫師たい雪の笠まだも

御ぞ〳〵よふせう者の立居こかく浮世はかる
いがましよおもひてこころせんとつむるいお
もひそこづむやんさかるいがましやいの
んるい

琴の歌品々

初組るてんらく

一ふきゝ玄も草の名若葉のとゝも草の名ふき
ぢぎい徳ありて冥加あらせ給へや
一春の花のきんきゝ〳〵はくるるうらくにりう
くるえんアゝくるるるんの音は図し曲をさい

つる

一月の前のさらしは夜さむを告る秋風雲ゐの
鳥かゝは琴柱に落るこゑ〳〵
一長生殿の表には春秋をこめり石老門の前に
は月のかげをそし
一弘徽殿のわそとのわたゝすむはたれ〳〵朧
月夜にないしのかみ光る源氏の大将
一たそやゝ秋半にさいたる門をたゝくはたゝ
くこもゝあけし寄の約束なけれは
一七夕の屋いふうもれとゝはなとゝかこゝろら

んらもやうれ枕しひのはなとかきれさらん

二組千鳥の曲

一梅の枝にこそ雪は降をくへ降かはいのよ
せん花にやられうくいす

一花散里のつきく〜らくく〜の琴の音花を花
の袖のかけ山時るおとろく

一思い寝の夏の間枕よ契る明け方さめそはも
ろのつらさそ酒のわかはあくなな

一小松原けてなく〜衛なにを思ひあかし鳥の涙
世を須磨の恨みまて我とひとりき洞かよ

一さらさらゆゆしのの及ばくはそらいそで八十
の森の蔭に獨をそらいそ

一英ほの松原ふきへて澳津浪もあらく〜な水
にうつるふ月とともに詠あはつく富士山

三組小車の曲

一心つくしの秋風の須磨のうらはの浪枕衣片
しく獨わて寝てひすはめよな〜

一古里をはる〜と渡て寝に角田川都鳥に
こと〜はん君はあるやなし〜やと

一春の初の暮に寝をさますは時る自然に見ゆ

は月ふさらす卯の花

一きりにたゝすむしわ車やつしてたつるをくる

ま人間忍ふの契りこそ更て嵐やのかよひ路

一あすゝ川の水よりを硯の水にせき入れて書く言

の葉はつきまゝ一つ今らうくらうさん命りや

一数りし青のたそかれさるゝふかき空だきこ

見かへる方の秋の夕をひらゝや神の移り香

四組信吉の曲

一天下泰平長久に治まる御代の松風鶴ハ千

ゞせんふる吉の流れよ亀ハ万

一人されぬ契りはなかりしも物思いつゝむとす

れと紫の色に出るそはかなき

一はかなくも恨なき月をいかて恨なしこにか

くに我袖はゝえぬ涙の夕暮

一花の色人の夕暮孤月和にひく神はさたかな

らぬ契りこそ心淺くはえけれ

一信吉の宮所かきならす琴のねに神の恵に達

そめて過し昔を語らん

一秋の山の錦は就四姫やをりけん時雨ふる

びことに色のまさてあやしき

五組朝顔の曲

一うらめしや我身は雪の契りか消にし人のかたみとて涙ぞわりや殘らん

一比翼連理のかゝらひも替れぞかなる世のならひさりとては昔は情ありしを

一若紫を手につゝ深き心の色ます長き契りを結ひしも草のゆかりと知へし

一東雲の霞に露をふくむ朝顔のかづらなをやにかゝる花のむれもかけ

一世々の人の詠めし身をまことのかゝみそと思へは〳〵涙玉をつらねつ

一吉野川の花筏さすゝ流もあらしなる岩波立き山風に四方へちれる花の香

六組菱の曲

一雪のあしたの嵐は梢の花の散ぬ情名殘惜しきはこにかゝに待えし君の帰るさ

一淋閑しや我身は雲ゐのかりの夕霧に言こあらぬ思ひをはいつの世にかはなれん

一まとろめはおもかけをまけ〳〵と短しか花に時鳥音信て初音に夢ぞさめける

一 誠れはいとゝたよ恋しき人の恋ひきに星ら
はくもれ秋の夜の月に恨みはあらじな
一 峯の嵐のかよふ谷の水の流れか寝覚にき
いしはたは琴の音にたがはじ
一 あふひの上のこきめきは加茂の御貫の折か
ら車争ひつれなきは深き恨なるべし

七組武蔵坊の曲

一 雲の上の詠めは有し昔にかはらねと見し玉
だれの内そ嘘なつかしやゆかしや
一 面白のさみたれ花橘の白ひより時鳥をとづ
れて語る夜なれどもあられも
一 中さに初ゆふ馴すは物をおもはしわすれ
は苔の石にあれと忍ふは人の面かけ
一 思ひ侘ぬにせきかねてうらめしや袖の涙は流
すさまじや獨ねなれ枕に恋のさらるゝ
一 武蔵坊に行暮て月を詠めに草枕恋しき人を
見てうたゝ寝の袖しほる
一 物をめくるてんてき琴の音にたぐえて七ね
んがよるの雨雪てさゝぬ夏の世

八組てるゝの曲

一 数ならぬ身ながら思ひもなくてあれたるし
人なみ〳〵の唐衣袖の涙そ悲しき

一 あこがれて思ひ寝の枕にかゝる面影そわが
こてかたゝゑと思へは夏そさめける

一 ちら雪のみゆきのつもるこしの路にて偕共
にかゝ試問しや寝乱れかみのかはぞせ

一 引くゝ夫々あまた有とつま琴のもとの心
かゝるすは琴柱に成よ松風

一 板戸の左右門は鞠をことんと蹴たれそ鞠は
板にこまりけり板はばらゝゝゝと

一 さらりこてはつれなき君が袂うあやにくたな
ひかぬはてかゝの庵の引綱

九位くいなの曲

一 桐壺の更衣のひゝくれんとう哀うはさたあ
なき世のならひにて夏のあいたそ悲しき

一 綾う秋に爰さめて おもかけを芙蓉の身より
俗う思ひをはいうでくんたゝらせん

一 秋の秋の更行く月そ西にかゝふゝ松風や浪
の音庵う寂そ淋しき

一 道〳〵せしこゝろみの中ゝにひかれて行衛

おもふ家婦のきぬの香りぞ床しき

一大そね今を盛りにしばの戸をたゝく音は風

上れるしの吉つれうあはは水鶏のこゑ〳〵

一青柳の行末にうりてなけや雪〳〵のぬふて

ふかさし柳のえの花ぬき

十組須戸の曲

一須戸ざいくも浦の名明石といふも浦の名さ

らしなの月どもに深めていさやあそばん

一春にはせしころもいつしの秋に移るは黒き

赤きのまぜの内にすゝある花の色々

東京帝国大学図書館蔵

一きりくす相すから何のを恨みすだくぞ秋も思

いに絶えかねていとゝ心の乱るゝに

一中々に人をは恨むまじうらみじとにかゝに

恨をふめ深方の程を悲しき

一三五夜中の新月限なきを西もき二千里の人

まてもさそね深めあらさん

一深更に月さく車の音りきこゆるは五条あたり

のあはら家に夕歌をきゝて

鞠つき歌

一向い面るは甚をしやないうてうゝ不うつゝて

小服物をさいてごこへ御はとを問たれを雑
子のお山へ雑ようちに雑ようはけん〳〵ろろ
ろ打よつて御茶まいれおたはこ呑れお茶も
たばこも望みどやないうその娘にちよつと
惚れた晩に参るのごち枕事枕に窓あけて窓
は切りまど戸はあり戸セッちり〳〵にそろ
り〳〵こ手をやれそ寝はどこ〳〵寝は勝さ
ら寝は四股寝は情のかけ所情かけての其後
に親に三貫子に五貫まゝてお遠そよや四拾
五貫四十五貫の銭までたかい豆買ふて何に

しよ出い来こて毎に つみ船は自銀艫は黄金
綾や錦の帆にかけてあすはのろろぞつんつ
くつの玉へ〳〵

盃をとり二合目々

一盃々々にをとらぬ者は牛の生れう焼蛤う乞
食小女鶴うたそらし〳〵
一千杉様くをとりをかけるで、清こう和れお
ま人様〳〵
一真丸御はれ〳〵十五夜月の輪の如く〳〵
一もふはやかろいぎさらかろ小雨のろる

にいさめへろ〳〵

一盃ゝゝも今日明日はかりあきつてはよあの
志をれる〳〵

らうさいかゝはち昔ふしぶそ

一山の端にすめは浮世に思いのまゝに自こい
ろやれ山の端に

一さたれ少柳乱れて見せうつれて心のうらゝ
まゝに

一こかれ〳〵て霞ともきえは跡はこわか〳〵君
頼む

一あまの釣舟はこかるれと甲斐もなき世の
浦にすむ

一恋をはしめたくらあしゝゝ今の我身のつら
き故

一頼みかけ恋き結ふの神のちかいかゝるない
ようたた

一神や仏を恨むは輪回過去の仏果せひもなゝ

一迷ひたんない中にてあらばなどやはゝの
〳〵らかゝめ〳〵

一思ふまい初心をつゝしよそに心のある様を

一月のとひくるそのあけぼの
袖にほる
一出る月の冴しうれ氣絶え
しや
一思いだす枕とかさろ枕らのゆくこがる
るに
一はなれ〳〵のあの雲れもあすのこれも
あのことく
一君はくれなゐ袴衣ハ空に〳〵あと色に
出る

東京都立中央図書館

東京都立中央図書館

昔わ六ぶし
一小六ついくる所の杖ばハ中が笛うらは
たゝ〳〵んゝあるあよをゝん葉の秋市わ六
昔ゝそ
一君ふ細道に杜とくゝみを植まい待る其方は
くゝみてもなし
桜川のふし
一地ゝの桜は散うちらぬう見たゝの散やらち
らぬいら花こそさんれ
はやり長唄

寺を中比門構ト云歌ハヤシ口付
京を中比天下ト云歌ハヤシ口付
宝永年青イト云本ハヤシ仇花口付
年の為年柴垣ハヤシ口付

一今の世のおたのをいいてはるまわる伊勢和
多相の伊豆ならはかみ下どもにうろわいて
来繁昌わきをいも恩に遊ひあるまじや阿部
う伊井なしらかるらんわきて退きたる紙屋
屋をなのかまどに薄並して多くの米をもり
あけて大和の玉を加増して讃岐国江をさし
かへん備後表に修理をし幟貝よりも青き
石谷等をめしおこし町の仕立きをさせんよ
り恐ともに相添えて天下の仕立きさせよ
かし伊豆人氏の為て利をはつ公事はは石

東京都立中央図書館蔵

谷なしてかうぐせん世召の儒者の見せしあ
にたいてしらきる道者をうつ和拡まを流し
て一文銭う葉りてあるせん等をえう出し大
和言葉をいいかけて天下の仕立するならは
君長久なるへきたいやしき下の心も労
りけてたる臣下とと今の悪臣共侍にあらた
めなしてあるならば正罰かく人冠の共怨会
や服ひ来て如何なる天魔出て来り天下を奪
ふ其時は富士の山はと集め立くさいか权自か
わ何ならず利銭商い分別りおたあだてして

人民を飢饉かし等なす物を改めかへん仕至
せよ其忠臣はうゑ君のためにてなふて怨(あだ)ぞか
し忠臣等と云事は天下忠孝政民の苦みなき
やうにすることそ君のおためなれ天下お孝あ
るはあめかゝの淺宣は諸將軍のものぞか
し上もうかれよゝかれ下がよれぞ上もよ
し上のゆかみをゝして直さんことは愚ろ
なれさはありなすうちを民ようも上を苦ふ適な
れやゝ十に一つも誠あれ

さよの中山長奇

一我等が以前若いはさよの中山ゝゝてはゝ
らみしめ鶴に行逢て一枝なりけとをを引で
一枝なびくは易けれど我等をにせに毒持て
からかゝかをのふくしに刀試しに仕り刀
の刃からふらまれそこへ和尚様ゝ奇てさよ
の清水でこり上げて衣の袖へかいくるみ門
前人に預け立く門前人のやさしきはあそこ
や宴のもらひ乳でナ三までもそだて立明る
十四の春の頃生れぬ前の父じやゝやら枕元に
もあゝあある親の歌がうたゝは京で一番研

座様一年ときして二年目にごこのいつくの
くしややらつとげとてもて御なる刀ばよい
が中かけた何をためして中かけた皆も御存
し御なら〳〵が秋等が以前若いおりゝ夜の中
山通るとて屋みしゆ扇に行逢て一枚ケいけ
ごまを取れ〻一枚ケいくはやすけれど秋も
にせに書おてからのおかをのにくゝみよ刀
試しに仕り其時刀の中かけた研いでちされ
研屋様ごいでおましよは安けれど五ゟ三ゟ
に出来ましよわ五ゟ三りにより出来じ三十

日過て取御ぶれ三十日過てとりに来て秋等寺
以前言たこと或耳に触々聞付て秋の歌とあ
る程に三すやゝを聞まいのがすまい思ふぞんぶ
に歌ゟおのの御臺へ参りては香をもりて
は花をとそでうかみやれたや様さよいよ
い
なげふー品々
一こんこ御ならば持て来てたもれ伊豆のお山
の椰の葉をお山のないづの伊豆のお山のな
きの葉を

一清てくやしきにせ紫やもとの自地がまゝ
やものゝ〜ら地わふらどの卒のら地がましどや
もの
一こゑはすれども姿は見えぬ君は深ゆのきり
くゝす源ゆのな君は君は源ゆのきりくゝす
一あはれなるめな梅若丸は知らぬ東に隅田川
東にをしらぬをしらぬを東に隅田川
ちなな物の奇
一夕辺くゝしなものは今宵はこゝがおゝこまり
にや横雲の国のさゝよしやむもとゝるまのおつき
やがおとまりじや
ゑよやふ
一昔しは杉の葉にさくゝ四五百人も寝たが今は
御簡畧でゝやよやういひとり
けやりまのゝ歌
一けやり物は何々そ弘徽殿十二段あゝゝ新
四鑓かんなべらぶうゝ
さんや源五兵衛ふし品々
一源五兵衛どらへ行く堺町のまちく言いさし
きから乗ゑを見れば役者かあゝや胃杉どや

と源五兵衛

一源と兵衛ぶこゆ〜さんやの町く高い土手わ
ら田甫を見れぞおろいかいてゞ打れとて布
引てと源と兵衛

一源五兵衛弟はさんちやの町へ高い二階から
かしわた見れぞけんとんかあいゝや身をさら
すと源五兵衛

一源五兵衛おてきにくぜろができてやりて揚
屋はおろうな事よいつもかはらぬつなきと
てれとあのや源五兵衛はあふりやると源五

兵衛

一源五兵衛たてきゞ通中見れば黄むく白むく
緋さゝやのわ袖紬わ袖をかふろにもたせ揚屋
注文で小歌をやりやると源と兵衛

一源五兵衛さんやへだてしていきやる金持大
小天鵞絨の袴紬縮緬帽なんぞ土手や田甫は
なけぶしやりてぬめると源五兵衛

一源五兵衛揚屋で浄瑠璃語るスもあるまい上
瑠璃御前十二段と源五兵衛

一源五兵衛おてきものたて常見れぞ帽が二人に

長さが三尋中は真紅の八ッ打ちで名源五兵
衛
一源五兵衛つけたる定紋見れば花は吉野よ紅
葉は高尾北は唐崎霞は外山替りあるまい我
が袖を源五兵衛
替り源五衆ふし品々
一新すごこへ行く東の方へ高尾山から吉野山
見れば外山勝山かく山唐崎志賀の夕霧
一まれに来る初のさしあるる宵はつらき思いは
度かさなれを誰も〳〵月のもとげ〳〵なればふ

吉原四季の名物
カコツケ松
高尾年産
ソヒ子ノツヽジ
名残ノ辻
名残の戸障子
引舟の屏風

くるつらさを神で底わらとすゝ〳〵
一春は吉野よりわいはさわ〳〵すゝ〳〵ハ
ぬかわる高尾外山に薄雲見れば雪のはたへ
にゝゝは初音對馬の伽羅の香袖の香
一更て戻りにかへてのお手いくは名残の別れ
の辻にならはまたやと頼ゝはおけと袖の涙
かはら〳〵おくられくるのきぬ〳〵
一袖の涙のかこつけはよ雪のはぐるたそひ寢
のつゝし帰るあしたの名残の屏風しみて逢
ふ和の風をもいゝふ引舟の屏風〳〵

一 藏世かはらぬかこつけ枯も香は一入色香も
まさる萩はすゝしき流い寝のつゝと秋は逢
ふ初の陽ゝきの名殘の厂金谷は逢ふ初の色
をもいとゝふり合せの庫色々
れそゝんふし品々
一 君は川向ひ秋(ワリヤ)は川前よゝ立てならへと
見たはのゝ
一 君はみやまのあの遊樓ゝ秋はさきたつ
ちは揺ゝ
一 君の姿は無ゝ立花よゝなれてそひしやゝ

下草にゝ
一 君は源山のふゝつむ雪よゝ秋は合ものゝ
唐冰ゝ
一 花に筵冊がみつけゝ枝をたゝれそゝ
花が散ゝ
一 小紫とは誰名をなゝ色にそみては
うへがないゝ
一 あのやおてきをたゝて見れば秋花を
ば柳に咲かせゝ梅の白いのゝあゝ君し
やゝ

一 桜の梢になく鶯を〳〵さすがさはるな〳〵
やさ〳〵きに〳〵
一 花のとつめど色には出て〳〵顔に紅葉が〳〵
影わる〳〵
一 恋の道とは浮名がたつに〳〵血におきやれ
の〳〵せいげん坊〳〵
一 君は他国へ身は武蔵野に〳〵こまる心を〳〵
なぐさめやれ〳〵
一 君と我とは川瀬の蛍〳〵人につめど〳〵
もく出る〳〵

一 恋てたんきやかはかげろうの〳〵いつかめ
くりて〳〵君に逢ほ〳〵
一 色にだされと我方の恋は〳〵袖の涙で〳〵
くがさる〳〵
一 咲た桜をなぜ惜めぬぞ〳〵春のさかりに〳〵
さく花を〳〵
一 様と我とは二葉の松よ〳〵千代をふるとも
〳〵かえられぬぞ〳〵
一 向ひ通りやるお若衆様に〳〵隣り言のかけ
やうがなさに〳〵紙が高ます〳〵鼻紙が〳〵

一行は極楽浄れは地獄〳〵ならんやつしの〳〵
吉原よ〳〵
一長い刀もさし〳〵やうす御ぞう〳〵後ろ〳〵
前ろ〳〵
一てきとうならひやくらい切き〳〵てきし
やないすの〳〵君〳〵やすの〳〵
一てきたゐれて土手さをくれは〳〵なぐらこ
ろれて〳〵うれいつ〳〵
一丁挑て来もすす神宝を〳〵こさかぶせ
ろ〳〵挑門〳〵

東樣原製

一やいさ図類いきをすまいう〳〵藤屋太郎吉が
〳〵やかはわく〳〵
一やいさおろんまたすけてたれそさおろん
またすけてたれ迚やりやらえ〳〵吉ろく
〳〵

さうき奇

一思ふ淫にちつちやかさおゝかちとりかちゝ不
んとだかくもおせさい〳〵おろさ〳〵大
もこつちで合点じやこのきうもひどつして
くれきういとうてさんときう〳〵のきうこ

の船槽寄て忍いとんぶり笠てまがまいまでは
来たれど見つけられてはどうもなりませぬ
了簡至極もないこんじ
一すい〳〵いまござは見付りから風馬引寄
さゝやんふくりさとうまゝかいと打棄て大門
口へぬつと入ちやのこ階へくるくるくる
くるくる〳〵くるくるとかつけあがりて石灯流
の扇を抜きなかの間三間はらりつとひらい
てあげや帰りのよねうちをひ〳〵んかりくる
〳〵りつとまねかれけるんな五つは明にま

東樣原製

きまでまたれば見なられてはどうもなりま
せぬさてさん〳〵まごを郎さらはやおつこ
せいり了簡至極もないこんだ
京はやりふし
一花見車を引きやるはよいがよりふりして
手をとるなやれ手をとるな御所の女房衆の
手をこるな
浮世はやりいそぐ紙ぶし
一狐くるいく〳〵こん〳〵殺して人をまわすた
はこぐきふうを舐くしてぬめてこらんでせ

うはがゝはこをめしませうのいやゝ（橋屋）
（エビスヲロシノフシ）
がよあろう見よう不見まい不勘之ゞ芝居見ゝ
ふてはいりとうてをつくゝゝすなら
はいりやの一ふくしてから入ませうつるて
んゝゝ（柄子）のりたるをまうふりまさつ
めでたいさとらじゝや
かうせうかなふし
一破れやくらんにばん茶をいれてかけた茶碗
に石のない茶筅茶延座布団むきはら枕ふすま
座敷にへりなし（塵）でくるかゝゝと待夜はこ

いて貧乏男や喉すぼりさよかみのゝよい
芝居々さよかみのそつこでうけだせ三百文
のつちりふぐゝてるふし
一親はのつちりふくさる子はのつちりふぐじ
るゝゝ親はのつちりふぐさるゝはのつちり
ふくさるゝのんそふくそふくさる
るゝゝらふぐよいうすがよいちんゝばか
すてゝんすつたりむけたりはげたりゝそ
りやさてなよいしるめられたそれやさてよ
い芝居（水アビセブル）町のわらさ面んうまこ者うおもとく

ざやいさみての長市坊長市おきゝやれおか
くもきゝやれ兄の姫ゝ氣がそれゝ長市坊な
るもならぬも月もとでこれる今のめもとは
なる月もとてうしこい

谷中うゝきぶし

一谷中の割り廻し教えに任せて引南無妙法蓮
華経うゝ〳〵〳〵〳〵う佛になるこもくゝ
んくゝつ佛このすき申たき夜ねふつ申のみ
たくならめゝむけんのかまさ落る地獄のか
まおこ玉子の肴でのめへせたきへたさわつ

たゝつときゝ御免せ五左衛門つたりへ長左衛
門たいかけ中の盃よゝくゝ大事がやあれ君
のつけさしのめきおもちや肴をしよ

御門徒與五平ふし

一おゝ五平ゝおきみたんぐ〳〵おすのこおぐ
みちり〳〵おかますのおふくゝらたおちみた
たり〳〵おあぶとこおふんでおぶとこむけ
べいでおゝこちよゝんおともしびこゝやむゝふや
らのゝおゝたうはおふやらのおそんれは
えいおふやらのおそんれはえい

大坂からすみぶし

一大坂天満でんつうわうてんねりどうせん
せんかしすみ合近江ら茂四郎のり子孫(しそん)ら三
郎うひようどにぎりたいこおり(下)りう〳〵
同しくならはかるさやませ〳〵

吉原さよくりさよぶし品々

一どてもかなるぬ深世ことさらばどてもろならぬ
ぬ立路とさらは粗くおこもの逸の逸さよく
りさよ所々くりさよあいよの

一草の尾りの蒔の扁にくいつうおてきとまた

東樣原製

枕なして思ふ言の葉語りたゆさよくりさよ
所々くりさよあいよの

一生姜畑に若荷を植へてことしや子をごるた
のごるさよくりさよ所々くりさよあいよ
の

一逢ふは別れとかねてはしれどあふは見かれ
の初めとたれと思ふ河は袖しるさよくり
さよ所々くりさよあいよの

一神や佛に祈るはたきやれ〳〵過去の因果は
是非もなやさよくりさよ所々くりさよあい

よの

一つらき音妻のはてしに我は〳〵角田川原の流れする志よくらさよ所々くらさよあいよの

一君に思ひは信濃路渓間〳〵胸にたく火はたえやらぬさよくらさよ所々くよさよあいよの

一思ふ其夜の時雨は続〳〵ぬれてくるものの音もせすさよくらさよ所々くらさよあいよの

東樓辰製

一そちとこちとは二世迄そをゞいてものして起請まて書いて今は起請のもせすさよくらさよ所々くらさよあいよの

一そをた思へは雨降りよはそをな思へは涙降ぬ秋もたとりくるそよなかの迄さよくらさよ所々くらさよあいよの

△淋敷座之慰終、

右此双紙者、好今様人数之畢、且雖我不好此至老後而、昔懐敷節為可披見斯集冊訖

延寶四丙辰

八月二日

東京大学
東洋文化研究所